陳舜臣さんを語る会通信

NO.17　Sep.　2020

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2020年9月1日

陳舜臣作品に登場する李登輝さん

7月30日、李登輝元総統が亡くなった。97歳でした。各新聞、見出しに「台湾民主化の父」と付けたり、「親日家」と冠したり、多くの紙面を割いて報道していました。ここでは、陳舜臣さんの作品から３箇所と、陳舜臣さんも登場する司馬遼太郎『街道をゆく 台湾紀行』から一箇所を紹介します。また、陳舜臣さんとの接点を加えた略歴と追悼場の画像を添えました。　（編集委員　橘雄三）

李登輝元総統の追悼場が、台北市内に設置され、４万人超の市民が弔問に訪れた。
（中央社フォーカス台湾より）

西暦	李登輝さん略歴　ほか
1923	1月、出生。終戦の22歳まで日本国籍
43	京都帝大入学。農業経済学専攻
44	学徒出陣により出征
45	名古屋で終戦を迎える（日本陸軍少尉）
68	米コーネル大で農業経済学博士号取得
71	国民党入党
78	台北市長就任
84	副総統就任
87	7月、戒厳令解除
88	1月、蒋経国総統の死去に伴い、憲法の規定により総統に昇格
	7月、国民党主席に就任
90	3月、国民大会で総統に再選
	10月、陳舜臣さん日本国籍取得
	12月、陳舜臣さん41年ぶりの台湾。李登輝総統訪問
93	**1月、陳舜臣さん、司馬遼太郎さんと李登輝総統訪問**
96	初の直接選挙で総統に当選。5月就任
2000	5月、総統退任
総統退任後、9回、日本訪問	
01年、倉敷市で心臓病治療。04年末から年始にかけて京都観光。07年、「奥の細道」ゆかりの地訪問。18年の沖縄が最後の訪日	
20	7月30日死去。97歳

【李登輝さん登場ーその一ー「避病院」】

陳舜臣さんには、戦後、台湾へ帰国したとき、船が基隆港に着くと、乗客から伝染病患者が出たということで、一旦、避病院へ移されたという経験があります。当時、このようなことがよくあったようです。引用します。

このころ日本から帰った船客は、船で病人が出ると、ともあれ全員が避病院に入れられたようだ。

私たちより先に東京から帰っていた何既明さんたちもそうだったようだ。あとで何さんからその時のことをよくきかされた。その船には学生や学徒兵で除隊になった人が多かったようだ。（略）

のちに医師になったときでも、何さんはひまをみつけて日本に来て、二、三日ホテルに閉じこもって台湾で読めない本を、朝から晩までむさぼるように読んでいた。

そんな何さんでも、自分以上の読書家がいることを、この引揚船で知った。「寝食を忘れて」ということばがあるが、食事のときも本を手からはなさない。何さんに似て、巨軀の持ち主で、京大農学部から学徒兵として、日本の部隊に入っていた李登輝という人であった。彼らも避病院に入れられたが、何さんは李さんにむかって、

―そんなに本が好きなら、食事の買い出しなどはぼくがするから、きみはここで本を読んでおればよい。

読書家の二人はここで意気投合した。引揚船ではさまざまな出会いがあり、若い人たちの友情も芽生えた。何既明氏と李登輝氏との友情は、その後も長くつづいて、今に到っている。

『道半ば』（二〇〇三年　集英社）一八五、六頁

李登輝さん登場ーその二、その三ー

【李登輝さん登場ーその二ー「古本屋五人」】

神戸新聞連載『わが心の自叙伝　陳舜臣』「（十五）古本屋五人ー台湾の岩波を目指して」（二〇一一年一月三〇日掲載）から引用します。

二・二八事件の当時、外科医であった何既明（かきめい）氏は戒厳令の中、負傷者の治療と、同志との連絡に当たっていた。（略）

何氏は医師であったが、台湾人の意識を高めるための啓蒙運動が必要であると考えた。

ー台湾人の文化程度を上げなければならない。本屋を始めよう。最初は古本を売り、そのうちに出版を始めるんだ。台湾の「岩波」を目指す。

そして私も仲間になれと誘った。しかし私の滞在は予定より長引いていた。やり残したことは多いが、一つの区切りをつけねばならないと考えていた。（略）

こうして私は参加することができなかったが、台湾人を啓蒙すべく集まった5人を「古本屋五人」と呼んでいた。5人の仲間はほとんど同い年で、医者の卵であったり、大学の助手か助教授クラスであった。後に中華民国総統となる李登輝氏もその1人で、当時は台湾大学農学院の助手であった。純粋な啓蒙運動のつもりであったが、蔣政権は知識青年が集まることを警戒して、5人組の中の2人は白色テロで逮捕銃殺され、1人は大学助教授のときに病死した。

李氏と何氏の2人だけが残ったのであるが、労働者問題や農業問題で過激な発言の多かった李氏の身辺は特に危険であった。何氏は李氏を米穀商の実家にかくまったものである。かくまった者も同罪とされるので、覚悟がなければできないことであった。これを刎頸の友というのであろう。

後年、何氏は「舜臣さんも参加していたら、逃げ足の遅い彼はつかまり、今の文豪陳舜臣は誕生しなかったかもしれない」と書いている。

■もし、李登輝さんが捕まっていたら、「台湾民主化の父」は存在しなかったか、あるいは、別の人をいうことばになっていたかもしれません。

【李登輝さん登場ーその三ー「一九九〇年 李登輝総統公式訪問」】

『道半ば』から引用します。（「後日譚」三三〇-三三二頁）

それから私は四十年のあいだ台湾に帰ることはなかった。台湾では白色テロのすさまじい時代で、何既明（かきめい）氏はときどき来日したが、私の帰郷には賛成しなかった。まだ危ないというのである。何氏が日本に来るのは、読書家の彼が本を読むためであった。戒厳令下の台湾では、禁書が多く、自由に読みたい本が読めないのである。たとえば私の小説でさえ禁書になっていた。何氏はそのころ、日本に来ると、本を買い込み、ホテルで朝から晩まで読んでいた。

私はその後作家となり、中国大陸へしばしば旅行し、また父の店も中国貿易をおこなっていたので、台湾へのビザははじめから出るはずはなかった。

台湾で蔣経国総統が戒厳令を解除（一九八七年）し、その翌年、蔣経国氏死去によって李登輝氏が総統となった。こんなふうに環境がととのい、一九九〇年に私はやっと台湾の土を四十年ぶりに踏むことができた。（略）

私の帰郷にあたっては、何既明氏が舞台裏でいろいろと世話してくれたが、それには李登輝氏の支持があったのはいうまでもない。

陳舜臣さんはまず、総統府で、三人の随員（みな外省人）を従えた李登輝総統と話をしました。『道半ば』には、具体的な話の内容についての記述はありません。これは公式訪問なので、儀礼的、社交辞令的なものであったと思われます。そのあと、総統官舎に伺い、いろんな話をします。『道半ば』では、

「私は公費生で大陸に残った四十人ほどのリストを李氏に渡して、早く里帰りができるようにお願いした。（略）やがて公費生もなつかしの故郷に帰ることができた」と具体的な記述もあります。

『道半ば』p.117より　右は何既明氏
何既明氏は巨軀の持ち主

司馬遼太郎『台湾紀行』に登場する陳舜臣さん、李登輝さん

陳舜臣さんの作品からの引用は、第1、2面の三つです。ここでは、司馬遼太郎『街道をゆく 40 台湾紀行』から引用します。陳、司馬両氏の作品に登場する何既明（かきめい）氏については簡単な説明を加えました。

【『街道をゆく 台湾紀行』に登場する李登輝さん 】

一九九三年一月、司馬遼太郎さんは、陳舜臣さんと何既明氏を先導役に、官邸に李登輝さんを訪問します。引用します。

途中、陳舜臣さん夫妻が泊まっているホテルに立ち寄った。この人が、今夜の先導役なのである。

ホテルの玄関に立っていた。

「あ」と、笑顔になって、陳さんは先導車に乗った。

ゆくうちに、繁華なネオンがすくなくなり、官邸のなかに入った。

（略）

応接室は、広いながら、簡素だった。

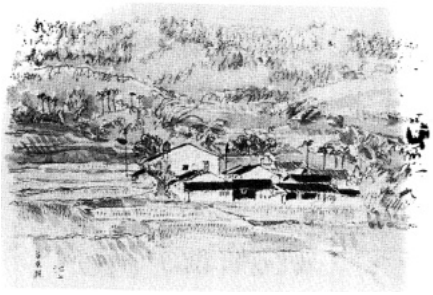
すでに何既明さん夫妻がきていた。他に政府役人などはいない。

李登輝さんとは、むろん初対面であった。

会う前から懐しさをおぼえていたのは、ひとつには、この人も私も、旧日本陸軍の予備役士官教育の第十一期生だったことである。

本島人には小柄な人が多いのだが、この人は例外といっていい。身長一八一センチで、しかも贅肉がない。容貌は下顎が大きく発達し、山から伐りだしたばかりの大木に粗っぽく目鼻を彫ったようで、笑顔になると、木の香りがにおい立つようである。

本「通信」は「陳舜臣さんを語る会」の会報ですから、官邸応接室での話の内容は略します。ぜひ、『街道をゆく 台湾紀行』をお読み下さい。



朝日文庫「台湾紀行」安野光雅挿画

補足■何既明（かきめい）氏

陳舜臣さんの遠縁。東京の医大に在籍していたが、終戦で台湾大学医学部に移籍、外科医になった。戦時中、何さんは、台湾、東京の中継地として、何度か神戸の陳さんの家に立ち寄った。陳さんは、むさぼるように何さんから台湾にかんする知識を吸収した。

陳舜臣氏ご夫妻の二人三脚、「わが心の自叙伝」執筆

陳舜臣さんの自伝といえば、まず、『青雲の軸』（一九七四年 旺文社文庫）があります。主人公・陳俊仁の孤独な魂の遍歴を描いた青春小説です。エッセーは三つあります。最初は『道半ば』（二〇〇三年 集英社）です。次は、「私の履歴書」（二〇〇四年 日本経済新聞連載）で、もう一つは、「わが心の自叙伝」（二〇一〇年―一一年 神戸新聞連載）です。

一九九四年、脳内出血のあと、懸命のリハビリをしながら、左手で書いたり、左手を右手に添えて書いたりという時期が続きました。そして、二〇〇八年、再び脳内出血があり、『群像』連載中の『天空の詩人 李白』が絶筆になった、とされてきました。

しかしその後も執筆はあったのです。二〇一〇年一〇月一七日、神戸新聞連載「わが心の自叙伝 陳舜臣」が口述筆記で始まりました。このことは、冒頭の「**この原稿が口述筆記であることを、どうかご了承いただきたい**」との文章でわかります。また、タイトルの字は、「わが心の自叙伝」が奥様・未知さんで、署名だけご自身です。毎週、日曜日の掲載でした。

私はこの度、連載を県立図書館のマイクロフィルムで検索しました。順調にすすんでいたのが、三月に入り、二十回を過ぎたあたりから、連載のない週が頻出、探すのを難儀するようになりました。そして、ついに、六月二六日、第二十八回の内容のあとに、「次回は七月一〇日の予定」と記されていましたが、七月一〇日の紙面に掲載はなく、隅に小さく、「『わが心の自叙伝』はしばらく休みます」とあり、再開されることはありませんでした。

この執筆は、奥様との二人三脚だったわけですが、奥様はこの年、五月十五日にお亡くなりになっていました。『神戸ものがたり』の「あとがき」には、「体調の関係で自叙伝が未完に終わった…」とだけありますが、陳さんの「気落ち」を思うことばがありません。

初期の作品、蘇曼殊を描いた『燕の影』

ここでは、『桃源遙かなり』（1965年 講談社）所収の短編、『燕の影』を取りあげます。初出は、原題『燕影』で、小説中央公論の1963年10月号です。　（編集委員　橘雄三）

《１．蘇曼殊を描いた『燕の影』 》

陳舜臣さんの初期の作品に、蘇曼殊　(1884-1918) を描いた『燕の影』という短編があります。

一方、本「通信」第15号で取りあげた『残糸の曲』でも蘇曼殊について相当な紙幅を割いています。執筆は『燕の影』、『残糸の曲』の順ですが、陳舜臣さんにとって蘇曼殊は自家薬籠中の物と言えます。

《２．蘇曼殊について復習》

本名は蘇玄瑛。曼殊は僧名。字、子穀(子谷)。蘇曼殊、兄の蘇焯、姪の蘇紹琼、すべて実在の人物です。蘇曼殊は中国人を父、日本人を母として横浜に生まれ、清末の革命運動に参加、また、バイロンやユーゴの訳詩でも知られ、中国の若者に大きな影響を与えた人物です。蘇曼殊は僧籍にあったということもあり、僧衣の画像をよく目にします。（上の画像は、飯塚朗訳『断鴻零雁記 蘇曼殊・人と作品』（1972 平凡社東洋文庫219）より転載）

ところで、蘇曼殊の出生について、父母ともに日本人とする説もあり、蘇曼殊を語るとき、血統の問題はついて回ります。

《３．あらすじ 》

大正３年春、大竹茂は偶然、蘇曼殊宅の近くに下宿することとなり、詩僧として、既に令名が高かった31歳の蘇曼殊と顔見知りになります。

二人は近所の菓子屋で顔を合わせ、成り行きで、大竹は50銭貸します。蘇曼殊は借りた50銭で、十銭のチョコレートを５枚買い、うち１枚を大竹に渡し、残り４枚を瞬く間にたいらげてしまいます。上掲『断鴻零雁記』の解説に、蘇曼殊の名号として、30いくつ並んでいますが、その一つに、「糖僧」というのがあり、「チョコレートを愛好し、こう称した」と記されています。当然、陳さんはこのことを承知で、このような場面から、物語を始めたのでしょう。お金がなければ借りてでも買い、満足するまで食べる。蘇曼殊とはそんな人だったのです。

４年後、上海の病院で、腸疾患で死にますが、食べ過ぎが原因だったといいます。不羈奔放の人だったのです。

大学を出た大竹は、長崎の中学に赴任し、やがて転任、神戸へやってきます。またまた偶然、大竹が住んだ家の二軒隣が、曼殊大師の実兄の住居で、大竹はこの家へ出入りするようになります。

この家には、主・蘇焯と16歳の娘・蘇紹琼が住んでいました。蘇焯は、弟・蘇曼殊の取材を極度に嫌っています。それには、紹琼が蘇曼殊に傾倒し特に最近、様子がおかしいことも関係しています。

紹琼の蘇曼殊への傾倒、心酔はただごとではありません。蘇曼殊の死因となった腸疾患も、大食と治療の繰り返しの末のことで、それは自死だったのだと考えます。「蘇曼殊、その人に繋がりたい」。紹琼は自殺することに決めます。

大竹は、そんな紹琼を気遣い、紹琼も大竹を気に入り、度々、蘇家を訪れるようになります。

登場人物に、周仁邦という、蘇家に出入りする50年配の華商が加わります。周仁邦は、かつて、蘇曼殊と知り合いだったといいますが、ことあるごとに、蘇曼殊を非難し、こきおろします。周の言動には、紹琼の蘇曼殊への傾倒を何がなんでも阻止しようという明らかな意図がみえます。そして、「**大竹さん、お願いですから、あの娘に曼殊のことを、これ以上吹きこまないでほしいのです**」と、紹琼と親しくする大竹と反目します。

陳舜臣さんは、このような言動をとる周仁邦の心のあやを次のように表現します。

（曼殊大師への無意識の憧憬が、周仁邦の心を紹琼にむけさせた。紹琼を愛することによって、彼女に大きな影響を与えた蘇曼殊大師に、こんどはあらためて烈しい嫉妬を燃やして憎むのではないだろうか？）

そして、紹琼はついに、毒をあおって死にます。

枕もとには曼殊詩集がひろげられていました。

契闊死生　君問ウ莫レ

行雲流水　一孤僧

端無ク狂笑シ　端無ク哭ス

縦イ歓腸アルモ　已ニ冰二似タリ

「燕」あるいは、「燕影」は、蘇曼殊のたくさんあるペンネームの一つです。また、『燕の影』の記述の大きな部分、『残糸の曲』に被さります。